

研 修 報 告

報告日 令和3年7月19日

会 派 名	民友
報告者氏名	相澤宗一、佐藤和典、近藤由香里
種 別	<input type="checkbox"/> 調査研究（ <input type="checkbox"/> 行政視察） <input checked="" type="checkbox"/> 研修会 <input type="checkbox"/> 要請・陳情 <input type="checkbox"/> 各種会議
用 務	鳥獣被害対策研修会「鳥獣被害の現状と対策について」
日 時	令和3年7月13日（火）13：00～15：00
場 所 （会場）	柏崎市役所 2階 委員会室
概 要	<p>【講師】 山本 麻希 先生</p> <ul style="list-style-type: none">・国立大学法人 長岡技術科学大学准教授・NPO法人 新潟ワイルドライフリサーチ副代表・(株)ういるこ代表取締役社長・環境省 鳥獣保護管理プランナー <p>【野生動物の生態と被害対策について】</p> <p><u>1. イノシシの生態と被害</u></p> <p>生態：体重 50～150 kg。昼行性（集落周辺では夜行性）。50 km/時で移動 1 mジャンプ・春～秋出産（平均 4.5 頭）・寿命 10 歳以下。増加率 1.64 倍 西日本から東北へ分布中。川を伝って移動する。</p> <p>被害：①農作物被害（特に水稻）②生活被害 ③交通事故 ④人身被害 が発生</p> <p><u>2. イノシシの被害対策</u></p> <p><野生動物被害対策の3本柱></p> <p>①被害防除（人）：電気柵などで農作物を守って被害を減らす直接的防除</p> <ul style="list-style-type: none">・光、音、においの忌避効果→最初だけ。・電気柵→「痛い」ことを学習させて進入を防ぐ。生態を考慮して設置しないと効果が出ない（高さ・設置場所等）。電気柵を張ると他の地域に移動、都市部への出没原因になる。同時に捕獲が必要。仕組みを理解し無理なく管理し、導入後は設置指導・策をチェックする体制を整備する。 <p>②個体数管理（動物）：野生動物の数を管理して被害を減らす直接的防除</p> <ul style="list-style-type: none">・農水省の目標捕獲数は年間 65 万頭。H30 年度：全国 60 万頭、新潟県 4000 頭。減らすには 7 割以上の捕獲が必要だが、狩猟者が高齢化し減少している。・積雪で効率よい冬に生息地（山）で狩猟、夏に加害個体を罠で捕獲するとよい。・罠：箱罠、くくり罠など→いちど捕獲に失敗すると学習し再度は罠にかからない。見回りするタイミングも重要（センサー利用など）



③生息地管理（環境）：集落周辺の草刈り等による間接的防除

- ・ 餌付け要因の排除：家庭生ごみはコンポストへ。柿・栗など果樹はきちんと収穫し、放置果樹は伐採。竹林、耕作放棄地もイノシシが好む環境。
- ・ 隠れ場所をなくす（緩衝帯の設置）

3. 中型獣類の生態と被害対策

- ・ アライグマ、ハクビシンは外来種。特にアライグマは早期の駆除が必要。
- ・ アライグマ：夜行性。水辺を好む。植物・動物ともに餌とする（両生類等）。年増加率 48%。トウモロコシ、スイカ、メロン、養魚などで被害が発生。寺社をめぐらし、文化財被害も報告されている。狂犬病など感染症を媒介する恐れがある。現在、新潟県内でアライグマの分布調査を実施、確実に広がってきている。

【主な質疑】

Q1) 昨今のジビエブームの影響を受け、ジビエ産業は成り立つか。

A1) 解体処理施設で一人雇うには300頭/年が必要だが、利利用率 10%なので 3000 頭/年は捕獲しなければ採算が合わない。農家民宿等で地元狩猟者から提供された肉を用いてジビエ料理を出すケースはある。



Q2) アライグマ駆除の具体的な対策は。

A2) 自治体で防除計画を策定することが必要。

所 感 等

【相澤宗一】

警戒心が強く、学習能力が高いイノシシは害がないと判断すれば、たびたび人家に近づき悪さを働く。よって危険を学習させる必要があり、それを広い範囲で施すことが重要。それには集団での取り組みが不可欠だが、イノシシが現れる集落は得てして高齢化が進む集落でもある。ゆえに集落がイノシシに負けられないためにも若い力が継続的に注がれるような施策を鳥獣対策と合わせ進めていかねばならないと感じた。

【佐藤和典】

ここ数年、野生動物の生息数や生息地域の変化により、柏崎市内においても住宅のすぐ近くや田畑にまで、イノシシやシカ、クマなどが現れるという事態が起きている。今回のポイントは、「イノシシやシカ、クマらを害獣とみなさずに、共に生きていける社会を目指すため」の講義と受け取った。現在では、これらの動物が増えすぎたため、人間との軋轢が増え、被害を減らすために多くの動物を殺処分しなくてはならない。しかし、そうではなく、生態系を理解し動物の個体数を管理する。そのデータに基づき、低密度のうちに最低限の動物を「間引き」して共存を図っていく。ことが大事であると理解した。アライグマの被害も今後は予見されることから調査研究を続けていきたい。

【近藤由香里】

主としてイノシシの生態と被害対策について、実態をふまえた効果的な方法について知ることができた。電気柵等による被害防除はあくまでも進入防止策であり、捕獲により個体管理しなければ根本的な解決にはならないことが理解できた。また新たな脅威としてアライグマの存在があり、増えすぎから対応するのではなく、事前に防除計画策定等、対策を立てておくことが必要だが、理解促進が課題だと感じた。